

## 獣医師として感じること（自然派それとも不自然派）

高橋康樹<sup>†</sup>（みどり湖動物病院院長）

八ヶ岳南麓地域で小動物を対象とした動物病院を開業してはや11年になるうとしている。この地域は高原観光地、別荘地として名高く、さらに近年においては自然の中での暮らしを求める都会からの移住者たちの永住地としての側面も持つ。私も東京都下で育ち彼ら移住者と同じ道筋にてこの地に居を移している。このような移住の経緯もあり、東京に在住する同郷の友人たちの私への認知は「自然好き」とされているように自認している。さらに言えば「獣医師」＝「動物好き」＝「自然好き」という世間一般的な図式を地でいっているような気分になっており、表向きの世間での評論もそう大きくは違わないとも思っている。

しかし、よくよく省みてみると実情はかなりのインドア派となってしまうっており、仕事の性質上、住居兼動物病院の中で日々を過ごすことが多いのはやむを得ないとしても、誰もが想像するような自然の息遣いを感じながら静かに暮らすイメージとはほど遠く、高価な防音設備を整えなくても近隣を気にせず大音量で映画DVDを鑑賞できるなどのメリットをより多く享受しているのが現状である。

さて、こんな私でも、時にゲストティーチャーとして授業を依頼され小学校に赴くこともある。多くの授業内容は、学校にて飼育している動物たち（ウサギやチャボ）の実際の抱き方など触れ合い方を児童に教えるというものである。さらには、飼育している中での児童たちの疑問点に答えたり、一緒にその疑問を考えたりすることもある。一通りの授業が終わった後には、「学校のウサギさん（鳥さん）へ！」と題した手紙を児童たちに書いてもらっている。大概是「ウサギさんはふわふわしていて温かったです。とてもかわいいのでちゃんとお世話をします」といったような大人の期待に答えてくれる内容であるが、ある時それらの手紙の中にひときわ目を引くものがあつた。

「動物たちを自然に返してあげて下さい。学校のウサギを自然に返してあげて下さい。」

われわれ獣医師は専門的見地から、学校で飼育している「ウサギ」が「カイウサギ」で在来の「ノウサギ」とは異なること、ウサギたちを含めたほとんどの飼育動物たちは自然に放すと、自身では生きていけないこと、例え生き延びたとしても他の生物などへの影響から環境破壊にも繋がることなどを思い浮かべる。さらに、ほとんどの飼育動物には、帰るべき自然がもう存在していない、あるいは自然とは無縁な程その祖先とは違う個体になっていることが多いのも事実である。これらのことを分かりやすく説明し、理解させることも我々の使命と考える。

しかし、一方で古くからの飼育動物と人間との関係の歴史を考えるに動物を馴化し飼育すること自体自然派の見地に立てばとても不自然な行為で、さらにその動物たちに科学の手を加える動物医療などその不自然の最たるものとの印象をもたれるのも当然なのではないかとも考えさせられた。

似非自然派たる私の選択しているこの小動物臨床獣医師という職業も、世間で漠然と評されていると思われる印象とは異なり自然派には程遠いのかもしれない。

もちろん文明社会の中で生活している以上、決して全てにわたる真の自然派など存在できないであろうし、また世間がそのような極端な自然派像を求めていないのも百も承知であるが、私自身に関しては隠れ不自然派を二重の意味で自認するところである。

## 高橋 康樹

## — 略 歴 —

- 1996年 東京農工大学卒業  
動物病院にて研修（東京都府中市）
- 1999年 山梨県北巨摩郡長坂町（現北杜市）に、みどり湖動物病院開業



<sup>†</sup> 連絡責任者：高橋康樹（みどり湖動物病院）